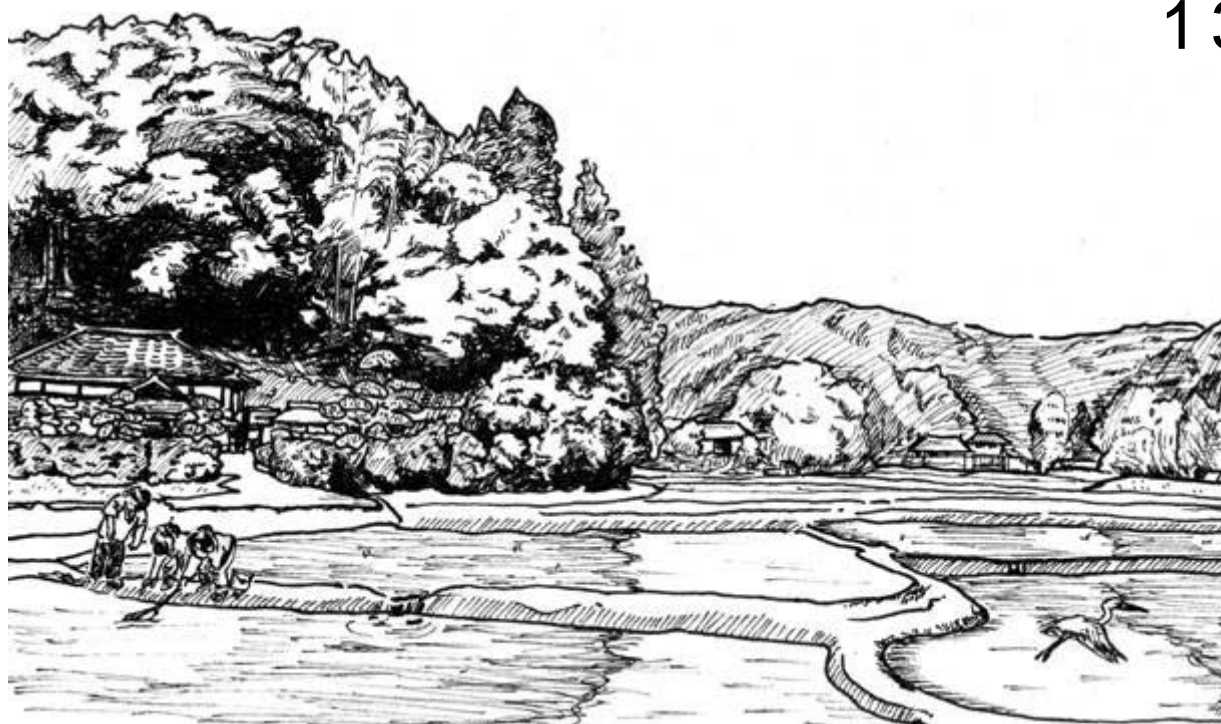


ちば・谷津田フォーラム 里やまの自然誌

13



目次

コウノトリが教えてくれたトキのふる里

ちば・谷津田フォーラム代表(千葉県立中央博物館)中村俊彦 1

千葉県若葉区大草町にいたコウノトリ：白井邦彦さん(大草町在住)からの聞き書き

藤田正子 6

トキに思い出しましょう，房総にトキが観られた頃を！

谷 英男 10

小山町谷津田プレーランドプロジェクト(千葉県緑区小山町)

NPO法人ちば環境情報センター 高山邦明 13

顧問 高橋在久先生を偲んで

ちば・谷津田フォーラム代表(千葉県立中央博物館)中村俊彦 17

谷津田ファイル 18

事務局より 19

題字：倉島貴浩(ワークホーム里山の仲間たち)

イラスト：松下優子

コウノトリが教えてくれたトキのふる里

ちば・谷津田フォーラム代表（千葉県立中央博物館）中村俊彦

はじめに

コウノトリの飼育繁殖を開始してから40年目、兵庫県豊岡市にある「県立コウノトリの郷公園」で飼育繁殖された5羽のコウノトリが2005年9月24日放たれた（池田，2005）。このことは新聞各紙やテレビ等でも明るいニュースとして全国に紹介された。

そんななか千葉県では、昨年12月に2羽のコウノトリが飛来し、2005年の春まで、里やまでひと冬を過ごした（中村，2005）。このことについては前号で紹介したが、かつて千葉にはトキやコウノトリがたくさん生息し、それは文献・記録だけでなく地名や人名にも刻まれていること、当会誌でもたびたび報告されてきた。

今年2005年3月、私は、長柄町とその周辺に飛来し生息していたコウノトリの調査に行ったが、そのとき、コウノトリが物語るその地域のトキとのかかわり、また千葉の里やまの自然と歴史・文化にかかわる以外な一面を垣間見ることができた。

コウノトリの生態

コウノトリは、江戸時代には東京での繁殖の記録もあり、かつての日本には普通の鳥であった（松田，2005）。千葉県内でも、「鴻の台」や「鴻巣」，「鴻池」，「鴻田」などの地名・人名も多く、人とのかかわりの多いその生息状況が想像される。現在、私が関係している「千葉市谷津田いきものの里事業」の対象地、千葉市大草地区には、「鴻巣谷津」とよばれる所があり、明治時代までは林の梢にコウノトリの巣もあったと伝えられている。このコウノトリは、トキと同じように田や川沼の魚類や甲殻類，両生類等の水生小動物を主食とし、付近の林地をねぐらとし子育をする。その生息環境としてこのような林地と水辺のセットが必要な、コウノトリはいわば「里やまの鳥」である。

この里やまの鳥、コウノトリは、生息環境の悪化とともに減少し、その日本産の個体はトキより前の1971年に絶滅している。その後は、ロシアや中国のコウノトリが日本各地で飼育・増殖され現在は約200羽飼育されている。全世界のコウノトリは約2,500羽である。そのうち野生の個体は中国の北部やロシア南部で繁殖し、冬期は中国南部や台湾，韓国などで越冬、ときどき日本にも飛来する（大迫，2005）。

この冬、2004年から2005年にかけて日本に飛来・越冬したコウノトリは3羽であった。その内の2羽がほぼ千葉で越冬したのである。

千葉の2羽のコウノトリの生息環境

千葉の2羽のコウノトリは、我孫子市北新田と長柄町で発見され、ともに2004年12月に飛来した。我孫子の個体の発見は12月25日、長柄町の個体は12月27日とほぼ同時期である。我孫子市の個体は、利根川沿いの平田が広がる北新田付近でダイサギやアオサギとともに餌取りの姿が観察されているが、そのようすが新聞報道され、集まった人の影響で一旦は姿を消したときもあった。しかし、その後も北新田付近にもどり、我孫子市鳥の博物館によれば、我孫子では2005年3月26日まで確認されている。

一方、長柄町周辺で生息していた個体は、里やまのある小さな谷津田をねぐら



図1. 谷津田のコウノトリ

とし、周辺を餌場としながら冬を越した。

私が、長柄町のコウノトリの確認に行ったのは、「コウノトリの生息付近で土木工事がはじまり、車両の往来等でその環境が悪化しているのではないか、一度、現地を見てほしい」との要請がきっかけであった。コウノトリが生息する水田の所有者の岡部弘安さん、そして茂原市在住で中央博物館生態園解説員の長沢陽子さんと NACS-J 自然観察指導員の長沢上さんの案内でその場所を訪れたのは 2005 年 3 月 15 日、快晴の午前 10 時半頃であった。そこで見た野生のコウノトリとその日の出来事は私にとって一生忘れられないものになった。



図 2 . 飛翔したコウノトリ

コウノトリを確認した場所は、幅約 50m、奥行き約 400m の小さな谷津田の一角で、手前のヨシ原の休耕田が奥を隠すかたちになっていた。ぼつんとコウノトリ 1 羽がこちらをうかがいながらしばらくじっとしていた (図 1)。私どももコウノトリを刺激しないようにと気づかいながらしばらく観察していたが、やがて飛び上がり谷津の入り口から北の方向に姿を消した (図 2)。水田所有者の岡部さんは、「近くにある別の水田に行っていると思う」とのこと、コウノトリは、この谷津以外にもいくつかの水田を廻りながら人をやり過ごし、また餌取りをしているとのことであった。



図 3 . 谷津奥の杉林の中の横穴古墳

コウノトリのいた谷津奥の田は数アールの典型的な昔ながらの谷津田で、最近ではほぼ無農薬の米づくりをしているとのことであった。水田の畦にはコウノトリの白い糞の跡があちこちにみられた。そばでコウノトリを見てきた岡部さんは、餌を心配し、2 月 19 日と 3 月 6 日にドジョウを買ってきてそれぞれ約 300 g と約 600 g、田に放したとのことであった。

トキの壁画との出会い

岡部さんから「この谷津の奥に横穴古墳があって鳥が描かれている」とのことで、そこを案内していただいた。暗い杉林の中の崖に数個の横穴があった (図 3)。どれも人の背丈ほどの高さで奥行きは 2～3m の横穴古墳の跡であったが、その壁にはいろいろな絵が描かれていた。五重塔のような建物や人の姿らしきもののほか鳥の絵もあった。

その鳥の絵のなかにトキとおもわれる絵が描かれていたのである (図 4)。その頭部には冠羽らしきものがあるのである。50 円はがきのデザインになっているトキの姿にそっくりである (図 5)。もちろんこれがトキを描いたかどうか、またいつ頃に描かれたものであるかは確定できるものではない。しかし、この長柄町には「鶺鴒谷 (とうや)」という地名があり、そこにも横穴古墳群が多数発見されているのである。この一帯の横穴群は、国指定の史跡として保存・公開のための整備事業がおこなわれているところであった (図 6)。トキの壁画を見た我々は、近くの史跡の整備工事の現場へ行ってみた。どうやらコウノトリの生息に心配された土木工事とは、この工事のようであった。後にこの横穴古墳群の調査報告書をあたってみたが、やはり多くの鳥の絵が横穴の壁画として描かれていることがわかった。こ



図4. 横穴の壁に描かれたトキと思われる鳥の絵



図5. 50円官製はがきのトキのデザイン

の鳥の壁画は、描かれた当時に野鳥が多かったことを物語っているとおもわれるが、付近は鵜谷をはじめ「立鳥」「鷺巣」といった鳥にちなむ地名が多い所である。現在も昔ながらの谷津地形の里やまが残るこの周辺は、多くの野鳥の生息域になっているように思われ、その環境にコウノトリの飛来・越冬がなされたものと推察されるのである。史跡の整備工事の現場で、偶然に長柄町の文化財担当の方に合うことができた。名刺交換の後に、コウノトリ生息を確認したと共とその工事用車両がコウノトリに悪影響を及ぼさないように配慮してもらうことができた。

「鳥葬」の為の壁画？

鳥は古来、靈魂を持ち運ぶ聖なるものであるという信仰があり、インドやチベットの山岳地帯にみられる「鳥葬」は亡骸を鳥に捧げ、その魂を天空の他界に返す葬儀である（岩井，2002）。長柄町の横穴群にはトキらしきもの以外にも鳥の壁画が多く存在する。古墳時代末期7世紀につくられたその横穴の中は高壇式とよばれるもので、玄室（墓室）床面は入り口よりも高い位置にあり、その上に亡骸を安置していた（千葉県文化財課，2004）。この横穴の鳥の絵も、死者の靈魂を鳥たちに託すものであったのではないだろうか。長柄町の横穴群の高壇式と鳥の壁画の存在は、この地にも一種の「鳥葬」があったことを示唆させるのである。

当時のこの地域にチベットのように亡骸をついばむ鳥類がいたかは定かではないが、日本でも、古事記のなかには、葬のときに「翠鳥（そにとり）を御食職人とし」という記述、また日本書紀には、天雅彦の葬のときに「鳩（そび）を以て尸者（ものまさ）とした」といった記述がある（菅原・柿澤，1993）。この翠鳥（そにとり）および鳩（そび）はいずれもカワセミのことであり、付近には「立鳥」の地名もみられる。当然、カワセミは今でもこの一帯に生息している鳥類であるが、土壁の横穴に巣作りすることから横穴古墳に葬られた死者の魂を運ぶ使者としてあつかわれたのであろう。

やはりいたコウノトリ

岡部さんの案内でコウノトリが頻繁に行くという別の水田に行くことにした。この日最初に確認した小さな谷津からほど近い広い水田、ただしこれも谷津田には違いない。確かにその水田にさきほどの



図6. 史跡の整備工事

コウノトリがいたのである。我々の姿を見ては優雅に飛び回り、少し追っかけ廻したきらいがあったのか、十数分後、台地の森を越えてあの小谷津の方向に飛び去ってしまった。再び小谷津にもどっているかもしれないと思い、引き返してみると、確かにその小谷津の奥にまたコウノトリがもどっているのを確認できたのである。ただ、これ以上追いかけてまわすのはやめなければと考え、車の中からの確認だけで即急に立ち去ることにした。

横穴群整備の工事車両の進入経路の入り口にあたる道路脇に、その工事を知らせる看板があった。何気なくその看板を写真に納めたが、その工事業者が「鴻池組」と記されていたのにはまた驚かされてしまった（図7）。この業者の工事ならコウノトリに悪影響を及ぼすことはないだろうと、妙にみんな安心しながらこの地をあとにしたのである。



図7. 史跡の工事中を知らせる看板

コウノトリを呼んだ？コウノトリのモニュメント

コウノトリの谷津を去って、岡部さんと別れ、車で案内していただいた長沢ご夫妻と昼食を取った。あとは最寄りの駅に送っていただくだけであったが、さらにもう一つ私に見せたいものがあるとのことで、大網白里町へ向かうことにした。車で約20分、大網白里町の国道沿いに、高さ20mはありそうなポールが立っており、そのてっぺんにコウノトリのモニュメントが空を飛んでいたのである（図8）。

アンデルセン童話のなかにコウノトリが子どもをつれてくる話があるが、それにあやかっただのか、まさに大きさといい、形といいほぼ本物そっくりのコウノトリのモニュメントであった。野鳥保護の目的で、飛来を促すためにそっくりの模型（デゴイ）をセットする手法はアホドリなどで試みられ、成果をあげていることが知られているが、まさに長柄町のコウノトリ、もしかしたらこのモニュメントのコウノトリを仲間と見なし降りてきたのではないかと推察されるのである。



図8. 大網白里町のコウノトリのモニュメント

国の特別天然記念物のコウノトリの飛来・越冬の地は、国指定の史跡であり、その史跡にはトキらしき壁画があり、史跡の整備工事は鴻池組という。また、近くには「鶺鴒谷」「立鳥」「鷺巣」の地名、さらにコウノトリのモニュメントが空を飛んでいたとは、あまりにもできすぎた話に私自身、夢物語ではないかと疑うほどであった。ただ、翌日から花粉症にみまわれる羽目になるとは、こちらの方は夢心地ではいられないその後であった。

コウノトリの再飛来と定着

今回の現地調査の状況については文化庁天然記念物課および千葉県文化財課に報告した。水田所有者の岡部さんはこのコウノトリの飛来を喜ぶかたわら、いろいろ悩みも持っておられた。特に、餌やりと稲作作業の今後については、私も関係機関と相談し、今後の餌やりはしないで様子を見る。また農作業は通常通りにしていただくようお願いした。その後もこのコウノトリはしばらく岡部さんの谷津田とそ

の周辺で過ごしていたが、我孫子の個体と同じ3月26日を最後にどこかにいってしまったとのことであった。

2羽のコウノトリの飛来、それは千葉の谷津田・里やまが、日本で最大級の鳥のコウノトリの生息をも支える力があることを証明する出来事であったと私は思う。この事は、その自然の高い生産性に裏打ちされた餌の豊富さ、また安心できる森でねぐら環境が備わっていたものと解釈できるであろう。

長柄町のコウノトリについては、巣作りのしぐさも見られたとのことであった。千葉にやってきた2羽のコウノトリ、越冬のためだけでなく、もしかすると永住の住みかを探しに来て、そのつもりで千葉にいたのかもしれない。彼らの生まれ故郷の大陸では、かつての日本がそうだったように自然が急激に変貌している。コウノトリにとっては新たな生息の場を探さなければならない旅だったのかもしれない。むかし日本から追い出されたコウノトリの子孫であった可能性も否定できないのである。そんなコウノトリ、是非、またこの冬も姿を見せてほしいものである。できることならペアで来てはくれないだろうか。そのときには、これまで以上に適切な対応をとらなければならないと思うのである。

おわりに

日本一のゴミ銀座になってしまった千葉の里やま。多くの鳥たちにとっては東アジアの水辺オアシスである。世界に誇る美しく豊かな千葉の里やま・里うみの自然・文化は、子どもたちの将来のためにも守り再生しなければならない。にもかかわらず、相変わらず即物的経済原理に翻弄されている。

そんな状態のなか、上空から見回し、日本の他のどこよりも真っ先に選んでくれた2羽のコウノトリ、そのコウノトリの飛来・越冬の意味について、我々はもっと深刻に受け止め考えていく必要があったのかもしれない。ただ、長柄町のコウノトリの谷津に、最近、残土が持ち込まれているという。

文 献

千葉県教育庁文化財課（編）. 2004. ふさの国文化財総覧第一巻：安房・夷隅・長生. 236pp.

池田啓. 2005. コウノトリ：野生復帰の発想から40年目の放鳥. 自然保護 488：10-11.

岩井宏貴（監）. 2002. 日本の神々と仏. 187pp. 青春出版.

松田道生. 2005. 江戸の風景から自然情報を読む. 自然保護 488：7.

中村俊彦. 2005. 千葉にコウノトリが飛来. ちば・谷津田フォーラム会誌 12：22.

大迫義人. 2005. コウノトリ. 自然保護 488：6.

菅原浩・柿澤亮三（編）. 1993. 図説日本鳥名由来辞典. 622pp. 柏書房.



千葉市若葉区大草町にいたコウノトリ

白井邦彦さん（大草町在住）からの聞き書き

藤田正子

まえがき

千葉市若葉区大草町は、現在「谷津田いきものの里」の整備事業が進められています。今年（2005年）の5月に、この事業に関わる人々の交流会が開かれ、大草町の自然について、白井邦彦さんがお話をされました。そのときに、ほんの2～3分でしたが、この谷津のひとつには、かつて、コウノトリが棲んでいたと話されました。そこで、そのお話をもっと詳しく聞かせていただきたいと、2005年6月8日お宅をお訪ねしたところ、4時間に渡ってお話を聞かせてくださいました。以下はその折の記録をまとめたものです。

【白井さんの略歴】白井邦彦さんは大草町に生まれ育ち、昭和18年に京大動物学科を卒え（専攻は動物群集生態学）、動物学教室研究員を経て、昭和22年に農林省へ出向し、稀少鳥獣や有害鳥獣のセンサスと保護と駆除の研究に従事。役職は鳥獣研究室長で、昭和59年に退官。日本鳥学会永年会員、山階鳥研賛助員で、現在なお、狩猟者講習会（県環境部）、猟銃の実技講習会（県警本部）の講師等を務める。



大草の谷津の地形や気候を説明する白井さん

記録

コウノトリは、近代まで日本の各地で繁殖しており、千葉県にも北部の流山から南部の館山まで、「鴻巣」という地名がそちこちにあります。しかし、何時頃繁殖していたかを明示する文書（もんじょ）は

見つかりません。埋もれているんですね。そのうち、民俗学の研究者たち等が発掘されるでしょう。

大草町には二つの谷津がありますが、そのうち南方にある小さい方の谷津は、谷津添いの山林を含めて、「鴻巣」という小字（こあざ）にされています。昔、ここにコウノトリが毎年繁殖していた口碑があるからです。



休耕田が広がる現在の鴻巣谷津

が、ツルではなくコウノトリだと思います。昔はコウノトリを一般に「コウヅル」と呼び、単に「ツル」とも言っていました。

ツルには何種もあり、千葉県にも昔ツルはいたと聞きますが、はっきり記録された文書は知りません。昭和の初め頃までの日本画には「松上のツル」と言って、松の上に止まったコウノトリの絵がたくさんあります。ツルは朝廷が瑞鳥（ずいちょう）としていたので、この鳥の絵は鳥好きの人や料理屋や宿屋等が、客室の床の間の掛け軸として喜んだため、やたらに描かれたのです。しかし、ツルは木の枝に止まりません。止まるのはコウノトリです。コウノトリとタンチョウ等は大きさも体色も似ていますが、コウノトリは頭上が赤くないほか、風切羽が黒いのですが、ツルの風切羽は次列と三列だけが黒いのです。それにコウノトリとツルは、似てはいるものの分類学上の位置がかなり遠く、コウノトリはむしろトキに近いのです。トキはずっと小さいですが、因みにトキは昭和の半ば頃まで、冬になると餌を求めて千葉県にも時おり現れましたが、繁殖の記録はありません。トキも宮中で神事に風切羽を使った関係

で名を知る人は多く、千葉県にもトキに因む地名や姓氏がたくさんあります。しかしごく稀に、冬期に出現しただけのようです。



祖父がコウノトリを撃った鉄砲を前に

コウノトリは、田んぼの近くの高い松の木などに巣を架け、田んぼで餌をとる人里の鳥で、大きな建物の屋根に巣を架けた話が各地にあります。例えば明治初年までは、江戸（東京）の町中の寺院（浅草の浅草寺や本願寺・青山の長谷寺・蔵前の西福寺・本所の五百羅漢等）の屋根に営巣していたといえます。いずれも周辺に湿地帯の広がる寺院です。豊岡（兵庫）では田んぼの中の電柱にも巣を架けた写真が残っています。巣は大変大型で、作るのが厄介なせいか、加修して何年も使います。

江戸時代には、江戸周辺 10 里以内が御留場（おとめば）（御鷹場）に指定され、幕府の猟場として民衆の狩

猟が厳しく取り締まられていたので、多くの鳥獣が棲息していました。御留場は御猟のほか、放鷹の訓練地でもありました。大草町は御留場の南方の外周にあるので、將軍の御猟の節には、獲物を追い出す勢子（せこ）を出しました。その折の鹿の角が、近隣の小泉町の仲田家（小泉村名主）に残っています。

江戸後期から明治にかけて、多くの欧米の学者や技術者が来日して、日本の生物について大冊の著作を残していますが、1886 年（明治 19）に米国のスタイネーゲルが、ニューヨークの自然科学博物館で発表した、レビュー・オブ・ジャパニーズ・バード、5 巻には、トキとコウノトリとサギを誌しています。もっとも、これに先立って 1873 年（明治 6）に、スインホーが、横浜（神奈川）で捕られたコウノトリについて、ロンドンの動物学会に記載しています。千葉県では 1884 年（明治 17）2 月 9 日に、手賀沼畔で♂♀2 羽が捕られた記録があります。

私の祖父がコウノトリを撃った理由は、稲作の被害を軽減させるためだったようです。江戸時代はこの辺りが佐倉藩（堀田氏）領でしたが、水田や湿地帯が多くてガンやカモの害が少なくなく、年貢米の上納に影響があるため、村々に少数の銃と少量の火薬や弾丸を貸与し、被害の多いときに駆除させていたといえます。私の家は典医をやっており、祖父は佐倉の順天堂で医術を修め、明治初年に当家へ佐倉から入婿したのです。その頃は幕藩政治が終わって明治政府になっていましたが、銃はそのままにされていました。明治政府は最初、治安維持と危険予防のために銃の取り締まりをしていましたが、幕府の御留場がなくなったので、各地で大量に鳥獣が捕られたのだそうです。それで政府は明治 25 年に、かなり詳しい狩猟法を發布したのですが、農林業上有益な鳥獣は保護し、有害な鳥獣は制圧するという方針でしたから、田畑の有害鳥獣はかなり捕られました。むろん、銃の数もごく少なく火薬も乏しいので、近代の銃猟には比べるべくもありませんが。そんなことで祖父は、ガン、カモ、キジ等の猟をし、コウノトリも撃ったことがあるということです。コウノトリはカニ・エビ・タニシ・カラス貝・蛙や蛇、魚、イモリ、野鼠等の動物食で、糲は食いませんが、稲を踏み荒らして倒伏させるのです。捕ってもあまり食用には適しませんし、旨くもないのです。ツルも同じですが、吸い物など宮中の祝いの膳に欠かせないものとされていたので、美味だと思える人もいましょうが、おそらく肉を清水にさらし、多くの香辛料を使って料理をしたものでしょう。祖父はコウノトリを食べなかったようです。



昔の都川（現在は蓋をした）と餌場だった休耕田

コウノトリは里の鳥で、人をあまり恐れませんが、銃を持って近寄れば逃げずにいません。それで祖父は、フンドシひとつで（長靴はなかった）、銃を持って川へ入り、岸の草生えに身を匿しながら、田んぼで餌を探しているコウノトリに近寄ったといいます。使った銃は火縄銃という先込銃なので、銃口から火薬を入れ、次に丸めた紙を入れ、その上に弾丸を入れ、更に紙を詰めて棒で強く圧縮し、火縄に火を点じて、狙いをつけて引鉄（ひきがね）を引くというやり方なので、発射準備をして発射するのに1分くらいかかります。ですから、身を匿して発砲の用意をしてから、鳥が射程内に入るまでじっと待つのです。銃は大変重く、銃身もずいぶん長いのですが、弾丸が鋳型で造った丸玉なので、近くないと当たりにません。射距離は20mくらいのもので、コウノトリは大型鳥ですが、それは羽毛でふくらんでいるからで、肉体は思いのほか小さく細長いので当て難いのです。

祖父がコウノトリを撃った場所は私の家の前の田んぼで、「鴻巣」の西方約1000mの地点です。ここは大草町で一番広い田んぼで巾は500mほどありましようか。そして、その真ん中を東から西に向かって、巾2m程度の都川（中流）が流れています。祖父はその川の中を歩いて射ち場を定め、岸に銃を依頼して撃ったとのことでした。その場所も現在特定できます。その田んぼは腰までもぐる泥田で、田へ入るときは、大きな田下駄を履いて入るのでした。いわゆる底無し田で、下層は腐った植物の堆積です。そんな田んぼですから、私の子どもの頃は、まだ戦時の食糧大增産時代ではなかったもので、耕地整理もされず、水田のそちこちに、ヨシやマコモ等の湿生草地があり、こじんまりした不整形のささやかな田んぼで、現在よりは鳥獣も多く、密度も高かったのを懐かしく思い出します。それがこんにちのように鳥獣の貧しい土地に変わったのは、第二次世界大戦後のすさまじい農薬（猛毒のホリドール・パラチオン等々）散布と、乾田化政策の結果です。

大草町は50年以上も前から禁猟区（今の名称は鳥獣保護区）に指定してもらっていますし、県は鳥類の放鳥も続けていますが、見るべき効果がありません。そのことを考えるたびに、近々110余年の昔まで、この地方でコウノトリが繁殖していた史実を思い出します。千葉の南行徳から江戸川添いに、広大な江戸川筋御猟場（新浜鴨場はその西端に当たり、江戸川河口の三角州の湿地帯）が作られたのは明治26年です。また、千葉の習志野は、元は幕府の馬の放牧場の一角でしたが、ここに明治末以後、陸軍の諸連隊や学校が続々と移ってくるまではキジの御猟場で、習志野の名物はキジとされていました。宮内省（現宮内庁）は貴顕や外国使臣等の接待のため、各地に御猟場を作りました。欧米人は猟と釣をことのほか好んだからでした。農林省は全国に100数十箇所も有料猟区を作りました。欧米に習って、狩猟場を作ったのです。千葉は東京から近いのと、草原や湿地がたくさんあって鳥獣が多いため、そういう施設がたくさん作られたのですが、経済の高度成長が軌道に乗る昭和40年頃になると、ごく一部の地域と、帰化獣（外来獣）を含む数種の中・大型獣のほかは、一般に棲息密度が激減してしまいました。



飛翔するコウノトリ

日本の鳥獣事情については、昭和以降はかなり詳しく記録されていますが、時代を遡るとにわかには記録の稀薄度が高まり、千葉にコウノトリがいた明治中葉以前は、記録が寥寥たる有様です。しかし日本に住んだ人々は、江戸時代という長く戦乱のない平和な時代に生きて、山川草木や、鳥獣虫魚を愛でた人が大変多いので、日誌や随筆として残した鳥獣談がたくさん匿れていると思います。その発掘には古文の読解力が必須なので、民俗学等に造詣のある方々に頼る必要があります。鳥類の研究者や愛好者は、それらの方々の相談相手になって、古文に現れる鳥名や鳥図等の鳥種の同定等を分担するのがよいと思います。私も他の分野の人々からの質問をよく受けてきましたから。

千葉市に残るコウノトリ由来の地名

藤田正子調査

(角川日本地名大辞典 12, 千葉県小字一覧および、千葉市図誌上・下巻に基づく)

1. 「鴻」または「鶴」が使われているもの

道場南町	つるがさわ 鶴ヶ沢			
鶴沢町	つるがさわ 鶴ヶ沢			
畑町	こうのす 鴻ノ巣	かみつるまき 上鶴牧	なかつるまき 中鶴牧	しもつるまき 下鶴牧
大森町	つるがさき 鶴ヶ崎			
大草町	こうのす 鴻巣	こうのすだい 鴻巣台		
下泉町	つるがさわ 鶴沢	(上・下泉町は同じ村だったが、鶴沢の地名も両方に別れた)		

若葉区貝塚町の車坂の下 鴻巣

注). □で囲んだ「鴻巣」という地名の場所には実際にコウノトリの巣があったのではないと思われる。それ以外の場所は餌場などで、コウノトリが見られたのではないかと推測する。

2. 他に可能性のあるもの

殿台町	こうやべた 高野辺田			
宮野木町	とりばみだい 鳥喰台			
大金沢町	しらとり 白鳥	しらとりべた 白鳥辺田		
誉田町 1・2 丁目	しらとり 白鳥	しらとりだい 白鳥台	しらとりなかだい 白鳥中台	なかしらとり 中白鳥
中野町	とりばみ 鳥喰	とりばみざかい 鳥喰境		
和泉町	とりばみ 鳥喰			
野呂町	とりばみ 鳥喰	ひがしとりばみ 東鳥喰	外鳥喰	
古泉町	とりばんの 鳥喰野			
富田町	まみづか 鳥見塚			
旦谷町	とりいとうげ 鳥居峠			



トキに思い出しましょう，房総にトキが観られた頃を！

谷 英男

1. はじめに

今では絶滅してしまった日本産のトキですが、昨年(2004)は大変うれしいことがありました。それは、佐渡市のトキ保護センターで中国産のトキのつがい人工孵化でなく自分たちで子育てしていることです。日本産・中国産と書きましたが種としては同じです。

トキはコウノトリ目トキ科に属します。学名: *Nipponia nippon* 和名:トキ, 鴛, 朱鷺, 桃花鳥, ドウ(鳴き声ターウ)などです。今回はトキの歴史や房総とのかかわりについて調べてみました。

2. トキの生態と歴史

ロシア沿海州・中国・朝鮮半島・台湾そして日本の東アジア一帯で多く観られたそうです。日本では地域により、留鳥・渡り鳥・漂鳥(昭和期のトキは日本海側から房総へ)となります。この鳥を中国では『幸せをくれる鳥』と言い、朝鮮では『昇る朝』と見立てられていたとのことです。日本では元々北陸・中部・関東地方が主な生息地でしたが江戸時代に広く放鳥されました。しかし日本に於いても絶滅の道をたどり自然状態はもとより保護されていたトキも観られなくなりました。ではなぜ絶滅したのでしょうか。その理由として以下のような事が考えられます。

日本を代表する鳥"神鳥"として珍重されていた。伊勢神宮の遷宮神事で天皇が天照大神 に奉げる「御刀」の柄に尾羽を用いた。

田畑を荒らす害鳥として嫌われていた。北陸地方には鳥追い歌(サギ・スズメと共に)がある。

明治以降の銃による乱獲(江戸時代では殺生は戒められていた)。矢羽・羽帝・羽布団・釣りの毛ばり・学術標本・輸出(婦人の帽子のかざりなど)・食肉(豆腐・ネギ・ゴボウ・ニド芋などと煮る)闇夜汁とよんでいた。民間薬(産後の乳の出が良くなる・血の道・冷え症・痔・ヒステリー症)としても珍重がられた。

谷津田と雑木林のある里山の自然環境の変化と減少。農薬の使用と土地開発。エサ(カニ・小魚・水生昆虫)と繁殖適した土地の減少をきたした。

3. 房総とトキのかかわり

1) 鴛はいつまで房総で観ることができたのかご存知ですか？

*五井/金杉 昭和 23,28 年にトキの飛来の記録がある太平洋側の最後の記録あり。

(その様子を地元の画家『時田直善』氏が描いています)

*手賀沼/下総昭和 27 年迄に 3 件の観察記録がされています

2) 鴛の名の付く地名を調べてみると(資料1)。千葉県に多く新潟県, 福井県には無い。石川に一箇所。

*東金市: 鴛嶺・鴛ヶ根=「トキ」の棲息していた土地 ~ 八鶴湖の右手、最福寺の裏山

『山武地方誌:地名の由来』に「鴛ヶ峯のおこり」について書かれています。

*佐原市: 鴛崎: 『牛堀町の昔ばなし』に殿様から「鴛田姓」もらう逸話があります。

日本地名大辞典に拠れば鴛崎の地名は全国でこのみです。

*長柄町: 鴛谷(とうや)の新堀谷=横穴古墳の入り口に「トキ」の絵が彫られています。

長柄誌には「全国的に見ても唯一の例」と書かれています

3) 鴛の名の付く名字(鴛田・鴛崎・鴛矢・鴛谷・鴛)「NTT 個人名編」で調査・集計(資料2)。

*多い順に"鴛田(367)、鴛崎(38 ほとんど佐原市)、鴛矢(14 市原・千葉市)、鴛

鴛谷"で千葉県の約 45%の市町村に存在し君津市・木更津市・千葉市に多い。

地名のある佐原市・東金市は 2 桁の単位であります長柄には有りませんでした

*佐渡市・新潟市にはまったく有りませんでした

4. おわりに

佐渡トキ保護センターでは中国産トキの増殖が順調に進んで 11 年後に野生復帰を目指しています。兵庫県豊岡市のコウノトリのは今年 9 月に試験的に放鳥されました。コウノトリの野生復帰はあと数年で先には達成できるでしょう。トキが教えてくれた事として「失ったものを取り戻す事の大変な難しさ」。コウノトリやトキはその一つの例といえます。

資料 1 . 鶺鴒の名の付く地名しらべ

1 . 千葉県に有る 3ヶ所

1) 鶺鴒ヶ峯・鶺鴒ヶ根 (東金市, JR 東金駅北側 1Km 弱)

*鶺鴒ヶ峯:八鶴湖湖畔の東側最福寺の後方「赤ボッケ」・古山王台の丘陵

*鶺鴒ヶ根:八鶴湖の西側東金高校・本漸寺の後の山に酒井定隆氏の居城「東金(鶺鴒ヶ根)」城があった。酒井氏は後に土気城主となる。

- ・『山武地方誌』の地名由来に「鶺鴒ヶ峯のおこり」について書かれている。
- ・東金市教育委員会発行『ときめき 1999 秋号』に遠藤賢一郎氏が「日本を代表する鳥一トキ東金の森を宿にした渡り鳥は鶺鴒ヶ峯の名を残して飛び去った」と緑の絵葉書第 9 回に書いている。
- ・東金市とうがねこどもセンター発行『散歩道 2000 年版』に戸村寿彦氏が「鶺鴒ヶ峰はなぜ、東金人の原風景となったのだろうか?」と書いている。

2) 鶺鴒崎 (佐原市北西部神崎町との境)

- ・『瑞穂郷土史』(2000 年佐原市教育委員会発行)に「鶺鴒崎の地名」と「鶺鴒崎城」について記述、又鶺鴒崎という地名は全国で一ヶ所と書いてある。
- ・鶺鴒崎は“トキの巣のある丘の崎”に由来すると日本地名大辞典に記述されている。
- ・茨城県『牛堀町の昔ばなし(ふるさと文庫)』に鶺鴒の伝説があり当地の島崎の殿様から r 鶺鴒田」姓をもらう逸話がある。
- ・鶺鴒崎の地には鶺鴒崎さん宅が 5 軒あり鶺鴒田さんも最近まで住んでいました。

3) 鶺鴒谷 : とうや (長柄町役場東南約 1Km)

- ・『長柄村史』の「鶺鴒谷」の項には“鶺鴒谷をとうやと読めるひとはこの地を知っている人以外にはいない。この町でも、もっとも難読の地名である”と言い切っている。
- ・『鶺鴒谷新堀谷(しんぼりやつ)の古墳時代末期の横穴墓の入り口に鶺鴒が彫られている。全国的にみても唯一の例であろうと上記村史に書かれている。尚同町の別の横穴群が平成 7 年に重要な遺跡として、国の文化財指定をうけた。

4) 土気 ~ 千葉市緑区

- ・トキの棲んでいたところといわれるが土筥(どけ):土製の物を入れる器の生産地

2 . 千葉県以外で昭和期に鶺鴒の生息記録がある他の 3 県を調べてみると

日本地名大辞典より 3 県内全域の地名を調査。なお()内は当時の主な生息地。

- ・石川県(能登半島)の手取川上流尾口村鶺鴒ヶ谷(とがたに・とがたん・とうがたに)尾口村史には享保 3 年頃からの地名、一説では昔トキがいたと由来が記されている。
- ・新潟県(佐渡・中越など)には鶺鴒の名の付く地名は無い。
- ・福井県(隠岐など)にも無い。

資料2. トキ(鴉)の名の付く「姓」しらべ(房総)

出所:NTT 個人名編 八ローページ 調査:May/2004

歴史性	市町村名	鴉田	鴉崎	鴉矢	鴉	鴉谷	小計
-	君津市	113					113
-	千葉市	93		4	2		99
飛来	市原市(五井)	60		10			70
-	木更津市	48					48
地名	佐原市(鴉崎)	16	27				43
-	船橋市	16	2				18
地名	東金市(鴉ヶ峯)	14					14
-	柏市	11					11
-	袖ヶ浦市	10	1				11
-	市川市	10					10
-	習志野市	6	1		2		9
-	富津市	4					4
-	茂原市	4					4
-	天津小湊町	4					4
-	佐倉市	1	2				3
-	成田市	2					2
-	八千代市	2					2
-	山武町	2					2
-	八街市	1	1				2
-	流山市	1					1
-	鎌ヶ谷市	1					1
-	白井市	1					1
-	浦安市	1					1
-	旭市	1					1
-	神崎町	1					1
-	小見川町	1					1
-	海上町	1					1
-	九十九里町	1					1
-	大多喜町	1					1
-	一ノ宮町	1					1
-	鴨川町	1					1
-	松戸市		1				1
-	大網白里町					1	1
飛来	我孫子市(手賀沼)	1					1
地名	長柄町(鴉谷)						0
	総計(36)	430	35	14	4	1	484

注1)飛来:昭和期に「鴉」の飛来記録のある市町村.

注2)地名:「鴉」の付く地名のある市町村.

注3)上記市町村は県内全市町村の約45%.

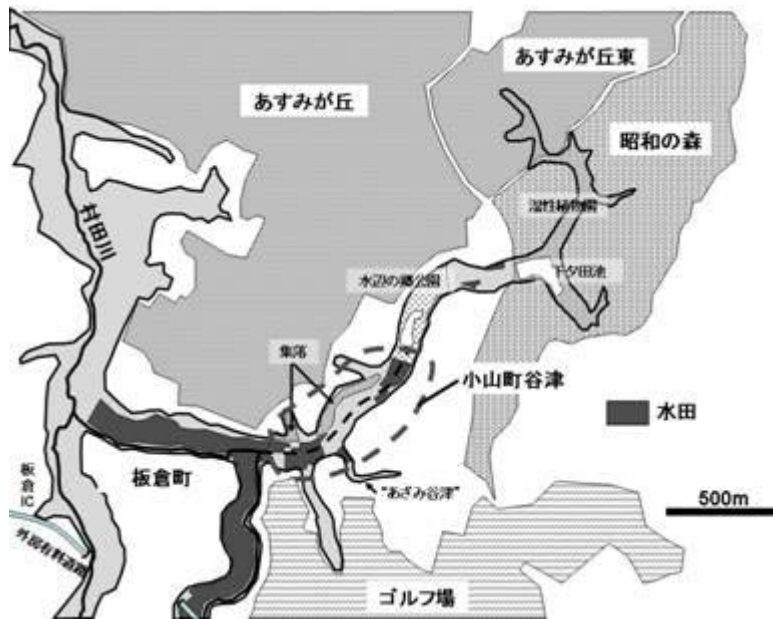
注4)「鴉」の付く姓及び地名は、佐渡市・新潟市にはまったく存在しない.

小山町谷津田プレーランドプロジェクト(千葉市緑区小山町)

NPO法人ちば環境情報センター 高山邦明

1. はじめに

外房線の土気に程近い昭和の森は分水嶺となっています。北は鹿島川を通過して印旛沼、利根川へ、東は短い流れで九十九里の太平洋へ。そして西へ向かう流れはここでご紹介する小山・板倉の谷津田を経て村田川に注ぎ、東京湾へと向かいます。昭和の森では湿性植物園(花菖蒲園)となっているのが谷津の源流部で、下夕田(しもんた)池にかけて夏のホタルでご存じの方も多いことでしょう。園を出て西へ新興住宅地あすみが丘の南の縁を縁取って谷津は小山町から板倉町へと続き、外房有料道路の板倉インターチェンジの北で村田川に合流します。



小山町周辺地図

豊かな湧水に恵まれ村田川の貴重な水源の一つである板倉・小山町の谷津ですが、あすみが丘の造成に伴って小山町の東端に谷津の真ん中に調整池を兼ねた水辺の郷(さと)公園が作られ、主流は暗渠となって谷津の中央を流れています。さらに谷津の幅が広がる板倉町側では水田の圃場整備が行われているため、一連の谷津を流れる小川はすべてコンクリート張り。となると一般的に谷津田としては貧弱な生態系を想像してしまうのですが、小山町周辺では実に豊かな生態系が維持されています。

2. 小山の四季

冬場は放射冷却の冷たい空気が谷津に流れ込み、台地の上と比べると気温が1、2度低いようです。湧水があるため、冬場でも田んぼには水があり、気温の割には暖かいので全面が凍ることはありません。そんな田んぼで毎年2月にアカガエルが産卵します。田起こしの頃には大きく育ったオタマジャクシが元気に泳ぎ、田植えが終わるゴールデンウィークごろには手足の生えそろったちびガエルの姿が見られます。その頃、田んぼの中で冬を越したヤゴからシオヤトンボやシオカラトンボが飛び始めます。梅雨に入るとぐんぐん成長する稲の間からたくさんの赤トンボが羽化します。アキアカネ、ナツアカネ、ノシメトンボ、マユタテアカネ、マイコアカネと種類も豊富。早朝に次々と飛び立つトンボを狙ってたくさんのツバメが田んぼに集まってきます。暑い蝉時雨の夏も木陰に入ると涼しいのは水が豊かなお陰でしょうか? 清らかな流れの上を悠々と飛ぶオニヤンマは子どもたちの憧れの的。台地の裾ではあちこちで湧水が見られますが、よく見るとそこには必ずといっていいほどサワガニの姿があります。雑



小山町の集落

木林のカブトムシやクワガタムシといい、生き物好きの子どもたちにはたまらない魅力が一杯です。小山町周辺の稲刈りは9月の上～中旬。おだけが見られる頃には赤トンボがきれいに色づきはじめます。モズの鳴き声が谷津に響く秋は春と同様に畦や斜面林の縁が一面お花畑になります。特に秋はキバナアキギリの黄色、イヌタデやミゾソバの赤、サラシナショウマの白など色とりどりでとてもきれいです。そんな草花の間からアカガエルが飛び出してくることがあります。捕まえてお腹を見ると名前の通り真っ赤。ぷっくり膨れたお腹にはもう卵が入っているようです。秋が深まってくると旅に出ていたアキアカネが帰ってきて田んぼで産卵します。ジョウビタキのヒッ、ヒッ、ヒッ、アオジのチッ、ツグミのクァ、クァ、と北から渡ってきた鳥たちの声が聞こえてきて冬も間近。小山の谷津では四季折々、様々な生き物を楽しむことができます。

3．希少生物の宝庫

小山町の谷津田に暮らす生き物の中には貴重種と呼ばれるものがたくさんいます。野鳥では冬場に多いオオタカ（環 VU 県 B 市 B^{*}）や夏鳥のサシバ（県 B 市 B）。谷津の上空を悠々と旋回している姿は猛禽ならではの雄姿です。水路の暗渠化はメダカ（環 VU 県 B 市 A）には厳しい環境なのですが、アシ原となった休耕田の水たまりでかろうじて生息しています。耕作されている水田が隣接しているお陰のようで、時折段差を乗り越えてメダカが田んぼに入り込んでいるのを見かけることがあります。枝谷津からの流れ



田んぼに繁茂する絶滅危惧種のサンショウモ

れは一部コンクリート張りとなっていますが、土水路の箇所ではホトケドジョウ（環 EN 県 C 市 A）が見つかっています。両生類では前述したニホンアカガエル（県 A 市 A）のほかにも、トウキョウサンショウウオ（環 LP 県 B 市 A）が毎年産卵する場所もあります。地元の方のお話では少し前までイモリも見られたそうですが、最近は確認されていません。昆虫では夏のホタル。ヘイケボタルは谷津田のあちこちで普通に見られますが、加えて今年初めて枝谷津でゲンジボタル（県 B 市 X）が確認されました。ゲンジボタルは西日本から移植された個体群が各地にいるのですが、小山町のホタルは点滅パターンから東日本型で昔からの自生していた可能性があり、DNA 鑑定ができればと考えています。植物では浮き草の貴重種が多く、オオアカウキクサ（環 VU 市 A）、サンショウモ（環 VU 市 A）、イチョウウキゴケ（環 CR-EN 県 B-D 市 B-C）が湧水のある谷津田で繁茂しています。こうした貴重種が小山町の限られた谷津田周辺で生息しており、生態系の豊かさの象徴となっています。

4．変わりゆく谷津田の環境

既に述べましたように、小山町谷津の北の台地の上はあすみが丘の広い住宅地が開発され、一方の南側の台地はゴルフ場となっています。最近では産業廃棄物の最終処分場建設の計画があり、物議を醸しだしています。あすみが丘の開発による調整池の造成のため、水路は暗渠化しており、さらに水源の昭和の森に隣接して新たな宅地開発が行われています。こうした開発が谷津田の自然環境に多大な影響を与えたことは確かでしょう。しかしながら、それでも豊かな生態系が維持されているのは、豊富な湧水と昔ながらの米作りが続けられているおかげと考えられます。

今年4月に市民によって行われた湧水調査では2本の枝谷津だけで10数カ所の湧水や「根だれ水」

*各機関レッドリストのカテゴリー区分、環：環境省、県：千葉県、市：千葉市、CR：絶滅危惧 IA 類、EN：絶滅危惧 IB 類、VU：絶滅危惧 II 類、LP：絶滅のおそれのある地域個体群、X：消息不明・絶滅生物、A：最重要保護生物、B：重要保護生物、C：要保護生物、D：一般保護生物

を確認しており、両枝谷津からは常に清冽な水が流れ出しています。本流の谷津でも台地の裾のあちこちで湧水が見られ、必ずと言っていいほどサワガニ（県C市A）が生息しています。また、田んぼの中に水が湧いているところもあります。豊富な湧水のために既に圃場整備が行われている板倉町側の谷津田でも冬季水が残っており、アカガエルの産卵場所となっています。

小山・板倉の谷津で最も豊かな自然が残されているのは水田の圃場整備が行われていない小山地区です。さすがに休耕・放棄田が目立ちますが、手押しの耕耘機や田植・稲刈り機、場所によっては手植え、手刈りで米づくりが行われ、秋にはおだかけの風景が見られます。泥深いこうした湿田はアカガエルや各種トンボ、浮き草などにとって好適な生息環境となっています。



昔ながらのおだかけされた稲

ニホンアカガエルの卵塊がいつも一番たくさん見られるのは豊かな水量の湧水が流れる枝

谷津の一つ、「あざみ谷津」。谷津の出口に数枚の小さな棚状の田んぼがあって、手植え、手刈り、おだかけの昔ながらの米作りが続けられています。その田んぼがアカガエルのお気に入りの場所です。谷津の奥の放棄田には水が貯まっても産卵しないのは、田起こしあとの水田に大量のミジンコが発生することを知っているからでしょうか？前述したようにメダカが生き残っているのも隣接する耕作田のおかげと考えられます。また、秋には全国的に数が減っていると言われるアキアカネが湿田で多数産卵する姿を見かけます。アキアカネは見かけがナツアカネとよく似ているのですが、稲の上から卵をばらまくナツアカネに対してアキアカネは稲刈りが終わった開けた田んぼの水面にお腹を打ち付けて卵を産むことから、稲刈りが終わると水がなくなって乾燥してしまう圃場整備の行われた田んぼでは産卵が難しいことが減少の主因だそうです。

やはり休耕・放棄田が多いのは気がかりです。アシ原となっている場所に入ってみると容易に膝上まで足がもぐり込んでしまう田んぼがあり、アシの根がないと危険です。地元の方のお話では、深い田んぼではかつて田植えをしている人の菅笠しか見えなかったそうで、耕作を止めた理由がわかります。放棄田に土を入れて畑となっている場所があったり、ヤナギが侵入していたり、また、不動産業者が保有している放棄田もあるそうです。現在、稲作を続けていらっしゃる農家の方の高齢化が進み、同時に後継者不在の状況を考えると、現在の豊かな生態系の維持は非常に困難な状況です。

生態系のかなめとなる生物を生態学の用語で「キーストーン種」と呼びますが、谷津田の生態系では昔ながらの稲作りをする人間こそがキーストーン種だと思います。稲作あつての自然ですから。そのキーストーン種が今、各地で絶滅の危機に瀕しています。小山町の豊かな谷津田の自然もまさにその状況にあります。

5．谷津田生態系の保全に向けて

本会では昨年と一昨年の2回、千葉県からの委託を受け、NPO法人ちば環境情報センターと共に谷津田でのこども環境講座をここ小山町で行いました。今年は10月に情報センターが独自に同様の講座を開催し、あすみが丘を中心にたくさんの小中学生が参加しています。また、環境情報センターの研修会をきっかけに、あすみが丘在住の松下恵美子さんたちが発起人となって、この7月から自然に親しむイベントと毎月定例の自然観察会を行っています。自然観察会では茂原高校の細川隆先生が小さな子どもたちにも分かりやすくガイドして下さり、毎回、多数の親子連れが参加しています。11月からは放棄された田んぼを復活させる活動もはじめました。

危機に瀕した谷津田の自然を保全していくためには、地元の方の力だけではなかなか難しいものがあります。周辺の住民、小山町の場合は新興住宅地あすみが丘をはじめとした人々の協力が必要です。そ

のためにはまず谷津田の自然の豊かさ、そこに身を置くことのすばらしさ、楽しさを多くの人に知ってもらうことが必要です。私たちの活動はまずこの「知ってもらう」ことに重点を置いています。同じ緑区の下大和田で続いている谷津田プレーランドプロジェクトと目指すものは一緒です。小山町では活動では地元の方が積極的に参加、協力して下さっていることが大きな特徴です。小山町では谷津田の中に地元の皆さんが暮らしています。谷津田が私有地であることはもちろん、すぐ近くに地元の方の暮らしがあるのですから、活動を行うには十分な配慮が必要です。参加して下さっている方と密に連絡を取り、いつも「庭に入らせていただいている気持ちで」を心構えにしています。同時に地元の皆さんにも谷津田のすばらしさを再発見していただけたらうれしいです。



定例自然観察会では多数の親子が参加（右端が細川隆氏）

まだ始まったばかりの活動で、試行錯誤の段階ですが、少しずつ体制を整え、活動の幅を広げて行けたらと思います。地元の小、中、高校との連携、行政との協働などもこれからの課題です。

6. おわりに

小山・板倉の谷津に隣接するあすみが丘に転居し、谷津田の散策をはじめて数年になります。今でもまだまだ新しい発見があり、この谷津の魅力はいつまでも尽きません。歩いてすぐの場所にこのような素晴らしい自然環境があるのはとても幸せです。里やまの自然を壊して作られた新興住宅地に住みながら何を言うか、と言われそうですが、それゆえに何か自然のために力になればと思います。あすみが丘にはたくさん子どもたちが暮らしていますが、小山町のわくわく、どきどきが一杯の自然を知らない子がほとんどのようです。今子どもたちに必要とされている命の大切さ、探求することの楽しさを知る教育の場としても谷津田の自然は大切だと思います。身近な小山町をはじめ、多種多様な価値を持つ谷津田の保全に向けてこれからも活動を続けていきたいと思っています。皆さんもぜひ一度小山町の谷津田にお出かけ下さい。イベント等につきましては、NPO法人ちば環境情報センターのホームページ (<http://www.ceic.info/>) 等をご覧いただければと思います。



顧問 高橋在久先生を偲んで

ちば・谷津田フォーラム代表（千葉県立中央博物館）中村俊彦

顧問の高橋在久（すみひさ）先生が2005年7月29日御逝去されました。78才でした。先生は、千葉県文化財室長や県立美術館長、江戸川大学教授などを歴任され、この間NHK地域放送文化賞（学術）を受賞されたほか二度の文部大臣表彰も受けられました。歴史学、民俗学を専門とされながら美術史にも造詣が深く、「東京湾水土記（未来社）」「浅井忠の美術史（第一法規）」など多くの著作・論文を残され、私たちが千葉の文化や歴史を学ぶとき常に先頭に立って御指導下さいました。

特に、富津の御出身のこともあり富津岬の自然や海堡の保護・保存に御尽力され、東京湾をめぐる歴史・民俗また人と自然とのかかわりについてはいろいろな視点からの総合的研究の成果を発表されました。1995年12月には沼田眞先生（当時千葉県立中央博物館館長）たちと東京湾学会を設立されました。私も、東京湾学会の一員として歴史学や民俗学の御指導を受け、また東京湾にかかわる多くの人との交流の機会を与えて下さいました。

ちば・谷津田フォーラムの設立・運営に関しても多大な御支援、御協力をいただきました。会誌の9号（2003年10月）には「ヤツから21世紀の新風景の創造を」の御寄稿下さり、東京湾と谷津田の関係とともにその歴史的性と人々とのかかわりについてもわかりやすく解説して下さいました。また、2004年11月に発刊された「房総遺産：普通の人達の文化（岩田書院）」の中に「谷津田の見直し」の一項を設けられ、私がかつて御案内した千葉市金親町の谷津田について次のように述べておられます。

ヤツの水田と続く里山を観察し、行くまでは環境史上のヤツだけを意識していたが文化史の発見もした。この地区でいつからヤツの開拓を始めたか不明だが、遠い日に開拓されたままの小区画の水田ばかりがヤツの奥から両側に棚田状に見え、しかもそれぞれの水田の導水溝や排水溝には工夫が加えられ水が流されていた。文字どおり生きている文化遺産に出会うことができ、ヤツの自然と人生をさらに究明し保全の必要を自覚した。

高橋先生は、東京湾学会誌 2(2),2004年に、ギルバト・ホワイト「セルボーン博物誌」と「富津岬セルボーン化構想」という論文を発表されています。これは、先生ならではの視点で私たちの谷津田・里やま保全の活動にも大変参考になる視点を示されています。以下にその文章の一部を抜粋させて頂きました。

稀有の古典といえる『セルボーンの博物誌』の著者ホワイト（1720年～1793年）はいわゆる博物学者ではなくイギリス国教会の聖職者である。これは、博物学の論文集のようだが、本来が書簡であるので読むうちに村の眼前の光景が見えてくる。文字どおり「歩く・見る・聞く」ことを基礎にした記録で、博物学を専攻した学者ではないが先駆的に方法を示している。

魅了された私は、ホワイトの一地域への愛着振りに学んでいる。私の個人雑誌に『セルボーン』と命名し、さらには2度も、セルボーン村を実感的に訪ねた。しかも村での私は18世紀のまま保存されている博物誌の原郷で、ひそかに東京湾唯一の自然の「富津岬セルボーン化構想」まで自覚した。

東京湾口東岸に形成された富津岬は、流れの造形で尖角砂嘴の典型とあり、古代以来の普通の人達の歴史も秘めている。その先端海上には近代の明治政府による、人工島の海堡と呼ぶ国土防衛の要塞が2島もあり、東京湾口のランドマークになっている。さらに岬の海は東京湾では稀な、大衆に直結した里うみの典型で、海潮の満干の体験、出現する干潟での貝採りなどができる。もちろん地域の伝統的な魚介草採捕の生業もある。こうした海から生まれた自然と人生を、共生を軸にして保全・活用を目指している活動が「富津岬セルボーン化構想」である。

高橋先生ならではの鋭い感性と詳細な観察、そして郷土への深い愛着がにじみ出た文章であり、目を覚まされるおもいです。谷津田・里やまについても、先生からもっといろいろなことを教えていただきたいかったと残念でなりません。こころから高橋在久先生の御冥福をお祈り致します。

谷津田ファイル

エコライフちば NO.31 2005年8月24日



平成17年度のテーマは 『田んぼのエコロジー』

自然保護講習会開催



中央区の暮らしのプラザで、平成17年度「自然保護講習会『田んぼのエコロジー』」が、6月20日午後1時から50人の参加により開催されました。

講習の前半は、千葉県自然保護協会代表の堀内大（わに）みちるさんと「谷津田の生き物」展覧会について、千葉県野鳥の会会長でもある野鳥の保護と市の行政は、深い関わりがあることに訴え、最後に「子どもたちに食との共存が可能な自然豊かな谷津田を築くには、市民一人一人の取り組みが必要である」と締めくくりました。

後半の講演は、国立筑波高等学校教諭の田中正彦（たなか まさひこ）さんによる「メダカの実情」一生物多様性と谷津田・里山保全一、田中さんは、市内外の谷津田や里山の生物多様性を分けて詳しく説明されました。谷津田では、哺乳類や鳥類、両生類等の種類数が多い。溝道にすむホトトギスや、メダカ等の希少な種類が多い特徴があり、これまで農家の管理によって生物多様性が維持されてきた。しかし、里山は農家の高齢化や耕作放棄などにより土壌や池田の環境が変化しており、「これからは、農家・市民・行政の協働による谷津田保全の取り組みが重要である」と述べました。

6月20日、千葉市中央区で実施された千葉市自然保護講習会。テーマは谷津田・里山の鳥類や魚類

秋の自然体験楽しむ

親子連れら60人稲刈り



親子で稲刈りを楽しむ参加者たち

緑区で里山探検隊第2弾

緑区にある自然体験施設「レツゴー」で、親子連れら60人が稲刈りを行いました。参加者は、稲刈り体験や自然観察を行いました。

親子で稲刈りを楽しむ参加者たち

親子で稲刈りを楽しむ参加者たち

緑区大和田地区の里山探検隊第2弾が、6月19日（日）にレツゴーで開催された。親子連れら60人が参加し、稲刈り体験や自然観察を行いました。

親子で稲刈りを楽しむ参加者たち

親子で稲刈りを楽しむ参加者たち

千葉日報 2005年9月24日

「自然の宝庫」市民に開放

希少動植物が生息

市民の手で保全管理

若葉区

市民の手で保全管理

千葉市若葉区大草町の「谷津田いきものの里」が来年度から市民に開放されることになった

千葉日報 2005年10月29日

計画反対で住民がシンポ



約100人が参加したシンポジウム

多古・産廃処理施設建設めぐり 陳情強化など意見

多古町染井地区に計画されている産廃処理施設の建設計画をめぐり、同町コミュニティプラザで27日午後、計画反対するシンポジウムが開かれた。シンポジウムは同町の住民グループが主催し、地元区長が約100人出席した。

「産廃処理施設の建設計画は、多古町に大きな影響が出てくる」と述べた。多古町長は「計画は必要だが、環境への影響を軽減させる」と述べた。

シンポジウムでは、多古町長と住民代表が意見を述べた。多古町長は「計画は必要だが、環境への影響を軽減させる」と述べた。

多古町染井地区に計画されている産廃処理施設建設に反対するシンポジウムが行われた。里山「桜宮自然公園」に隣接する地域で、建設されれば周辺環境に重大な影響を与えることが懸念される

千都よみうり 2005年12月10日

「メダカの学校」池づくりへ

YPP小山町が草刈、整田

千葉市緑区小山町谷津田で行われた、小山町谷津田プレーランドプロジェクト「メダカの学校」池づくりが紹介された (本文13ページ参照)

千葉市緑区小山町谷津田で行われた、小山町谷津田プレーランドプロジェクト「メダカの学校」池づくりが紹介された (本文13ページ参照)

<事務局より>

ご寄付くださった方々

会誌 12 号発行以降、次の方々から合計金額 191,000 円のご寄付をいただきました。紙面を借りてご報告いたしますとともに厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

(2005. 12. 14 現在, 50 音順・敬称略)

秋本靖匡, 朝比奈隆, 阿部さと子, 新井セイ, 飯田三美, 飯村扶美恵, 伊藤邦夫, 太田慶子, 小田信治, 小野鈴子, 角川浩, 川瀬一世, 斉藤直子, 篠崎秀次, 篠原和子, 朱宮丈晴, 神伴之, 高野史郎, 為貝和弘, 寺野淑子, 外川仁, 永瀬洋子, 野間元彦, 長谷川雅丈, 花立良江, 林みね子, 原慶太郎, 福士融, 福田真由子, 藤川尚文, 星早織, 松下優子, 三橋和則, 宮澤孝蔵, 村杉久子, 森早苗, 山崎秀雄, 山田昌之, 横山武

【ご寄付のお願い】

会誌 12 号発行から、今回も 39 名の方から多額のご寄付をいただきました。ちば・谷津田フォーラムの運営費は、会員の皆様の寄付と助成金でまかなわれています。会の運営のため、今後とも引き続きご寄付いただきたくお願い申し上げます。

郵便振り込み口座番号：00120-0-187874 ちば・谷津田フォーラム

【原稿のお願い】

会誌に掲載する原稿を募集しています。谷津田保全に関する活動紹介や、多くの皆さんに知ってほしいことなど、投稿してください。原稿は、フロッピーか e-mail でいただくとありがたいです。郵送の場合は下記の事務所へ、e-mail の場合は、次のアドレスをお願いいたします。

原稿送り先 (e-mail の場合) : QYK16306@nifty.com (田中)

顧問 (敬称略・50 音順)

石川 清 (社会貢献活動企業推進協議会代表)

岩瀬 徹 (千葉県生物学会副会長)

大沢雅彦 (東京大学大学院新領域創成科学研究科教授)

楠岡 巖 (四街道ユネスコ協会会長・四街道ライオンズクラブチャーターメンバー)

ケビン・ショート (東京情報大学教授, 博物学・自然史ライター)

椎名益男 (ライオンズクラブ国際協会 (千葉県) 環境保全委員長)

中嶋拓子 (千葉県生活協同組合連合会顧問)

根本正之 (東京農業大学地域環境科学部教授)

組織・運営

・代表：中村俊彦 (千葉県立中央博物館副館長)

・副代表：岩田好宏 (千葉県自然保護連合副代表)、原慶太郎 (東京情報大学教授)

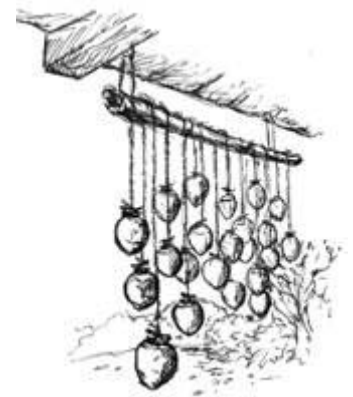
・事務局長：川本幸立

・会計：小西由希子

・編集：田中正彦, 小西由希子, 松下優子

・幹事：調査研究・教育普及 (田中正彦, 栗原裕治, 小川かほる, 小西由希子, 網代春男, 高山邦明, 中村彰宏)

保全活動 (大槻憲昭, 中野雅蔵, 高山斉一郎)



ちば・谷津田フォーラム会誌「里やまの自然誌」第 13 号

発行日：2005 年 12 月 25 日

発行：ちば・谷津田フォーラム 〒260-0013 千葉県千葉市中央区中央 3-13-17 代表 中村俊彦

(月・水・金の 10:00~14:00 には事務所当番がおります)

TEL&FAX 043-223-7807 HP: <http://yatsuda.2.pro.tok2.com/>

編集責任者：田中正彦, 小西由希子

表紙題字：倉島貴浩 イラスト：松下優子

郵便振り込み口座番号：00120-0-187874 ちば・谷津田フォーラム